

妖術者探知運動の論理：アフリカの事例を中心として

中島, 成久

<https://doi.org/10.15017/2231607>

出版情報：九州人類学会報. 6, pp.1-9, 1978-12-20. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



〔1〕 妖術者探知運動の論理

—アフリカの事例を中心として—

中島成久

ヨーロッパ列強諸国のアフリカ分割が進行する過程で、それに対抗するための動きがアフリカ各地から発生してきた。イスラム教のメシアニズムを背景としたマフディー運動や、キリスト教をもとにしてバンツ語族系の人々の間にひろまった独立（分離）派教会運動などがその代表的なものである。ここで私が考察する妖術者探知運動（Witch - Finding Movements）も、アフリカ近代史におけるその意義についての評価はともかく、それが植民地化の進行してゆく激しい動きに対抗するためのものであることでは、上の二者と共通している。しかも妖術者探知運動は、現代の文化全般の問題を考える場合にも、きわめて有意義な視点を提供してくれるものと思われる。

この小論では、妖術者探知運動を概観し、その代表的事例をやや細かに検討し、それが他の問題に対してどこまで射程をのばしうるかを考察してみたい。

〈一〉 妖術者探知運動の概観

妖術者探知運動が発生した背後には、不幸の説明原理としての妖術信仰がある。たとえば、ある男が穀倉の下で休んでいる時、突然その穀倉が倒れて、その男が穀倉の下じきになって死んでしまったとしよう。我々ならそれを偶然のでき事だと考えるのであるが、アザンデの人々は違った説明をする。穀倉の下では誰でも休むのに、なぜその男の休んだ時に穀倉は倒れたのだろうか。穀倉の倒れた原因は、おそらく白アリにむしばまれた結果土台が弱くなっていたためであろうが、なぜその男がいた時に倒れたのかは説明できない。それを説明するのが妖術である。彼を不幸に陥れようとする他の誰かの悪意の働きで彼は死んだに違いない、と説明される。

エヴァンス=プリッチャードは、『アザンデ族における妖術、託宣そして呪術』のなかで、妖術はアザンデの伝統的司法体系の一部をなしており、妖術、託宣、呪術の三つは三角形の各頂点のように整然とした体系をなしていると指摘している。彼はその三角形が社会の変化をもたらす政治的ダイナミックスとして捉える視点は余りもたず、社会の安定をもたらすものとして妖術信仰を捉えている¹⁾ Witch像は集団の悪の象徴である。Witchのステレオタイプは、逆に言うと集団の価値を象徴しており、それは社会構造によって規定される。妖術信仰は本質的に社会の価値を明らかにす

る手段であるから、告発 (accnstion) がなされた時、何がおきるかは集団の状態や、いかなる関係がその時再定義される必要にあったかによって決められる、と彼およびその継承者たちは考えている。²⁾

妖術信仰を細かく検討すると、地域によってその内容は異なるのであるが、原因の分らない不幸・渾沌の説明原理としての本質に変わりはない。植民地化が進行する過程で、従来の価値観や生活様式に大きな変化が生じてきた時、その原因を科学的に明らかにしえないアフリカの人々は、伝統的な不幸の説明原理 (妖術信仰) でもって、彼らのおかれている状況を認識しようとした。それが具体的行動となって現われた時、妖術者探知運動は始った。

妖術者探知運動は、サハラ以南のアフリカ各地から報告されているが、ベルギー領コンゴ、ナイジェリア、ニアサランドの事例がよく記録されている。運動のなかで、はやいものは19世紀末から始り、各地域では同種の運動が間歇的に発生しており、各地域間の伝播を示す積極的な証拠は余りない。

R.G. Willis は、こうした運動の基本的特性を次のように要約している。³⁾ 「単純な儀礼を用い、witch をみいだし、彼らを生中化しようとする。同時に、無実な者に対する神秘的な攻撃に対して保護を与える。なかば神話化された創始者がいるが、明確な組織を欠いている。伝統的な儀礼やものの考え方の枠にとらわれながらも、種族の境界を越えてゆく潜在力をもっている。」 私がここで問題としたいのは、Witch - Cleansing Cults の事例の紹介ではなく、それが他の問題といかに関わっているかであり、どこまで一般化しうるのかということである。それは、〈三〉で考えることにしよう。

〈二〉 妖術者探知運動の代表的事例

(a) ベルギー領コンゴの事例⁴⁾

レレ族の anti - sorcery cults の歴史が示すことは、それらが sorcery control の1つの方法であって、試罪法が禁止された空白期に登場したもので、sorcery を根絶するのにより効果的な方法であると約束し、cults へ入ることを拒絶した者を sorcerer だと非難し、部落からの追放という手段でもって対処しようとした。

ベルギー領コンゴでは、試罪法は1924年に禁止されたが、その与えた影響はきわめて大きかった。試罪法は伝統的な司法体系の要に位置しており、sorcerer だとの嫌疑を受け告発をされた者が、最後に自己の無実を証明する手段が試罪法であった。その手段が禁止されると、sorcery の恐怖はなくなるどころか、ますます増大し、人々の不安感は増大していった。このような時期に、人々の不安をさずめる目的で発生したのが、anti - sorcery cults である。

anti - sorcery cults には、やや千年王国論的な雰囲気を感じられる。カルトを受け入れたコミュニティは、再び邪術に苦しむことはないとされた。というのは、すべての不幸や病気・死などが邪術のせいとされ、カルトを受け入れたコミュニティは平和と繁栄の新時代に入れると期待されたからである。その時になると、人は存分に天寿を全うできるとされた。しかし、植民地化の進行の過程で生じる、白人との政治的・経済的なへだたりと、試罪法の禁止によってもたらされた人々の不安感は、cults の導入と、被告発者の追放などによっても、事態は満足に解決されなかった。

1959 - 60 年 — それはコンゴの独立前のことであるが — その時に、試罪法の爆発的復活がクバ族の間で報告された。多くの人が毒を飲まされ、何百人もの人が死んだと報告されている。

現在、sorcery 信仰そのものが消滅したわけではないが、anti - sorcery cults のような手段で状況に対処することの誤りに人々が気づくまでには、多くの犠牲が必要とされたのは事実である。

(b) ナイジェリア⁵⁾

ナイジェリアのティブ族の人々は、tsav と呼ばれる霊力をもつ人は有力な人であるけれども、同時に人を殺しうる力もあると信じている。tsav をもつ人が通常認められたやり方で、その権力を揮う限りは真の tsav をもつ人間だとみなされるのであるが、彼が一旦それをふみ外すと、彼はいかさま師と呼ばれ、tsav に対抗するための手段を講ずることが必要とされた。植民地下の混乱した状況も彼らは tsav の概念で捉え、それに対抗すべき儀礼を行った。

Paul Bohannan はこの種の運動を、R. Linton の 'nativistic movements'、A. Wallace の 'revitalization movements' というような概念で分析するのに反対して、それを 'extra-normal events' として捉えている。彼がいうには、どのような社会にも合法的な組織・制度のほか、邪魔物あるいは必要悪としか思われていない制度があり、それは正常なプロセスにあるできごとの再生に必要なものだ、とされている。そのことを、'extra-normal' あるいは 'extra-processual' という言葉で形容する適否は別問題としても、Bohannan の認識の高さに驚かされる。

植民地政府の記録では、1939 年の夏の終り頃、Nyambua と呼ばれる運動のため、Tivland の機能が停止した。Nyambua について役だつ資料の大部分は、この時の役人の記録が殆どである。第一次大戦後、イギリスが Tivland の管轄を始めた時、Tivland には集中した政治権力がなかった。政治は、ヌエル族のように系族 (lineage) の間でとりしきられた。イギリス統治はこのような状況で始ったのであり、Nyambua はイギリスの権威に拮抗するために、Tiv 族の人々が受容できる考え方をもとにして、Tiv の制度を再強化しようとしたものである。

Tiv 自身にも運動の起源は定かではないが、Jukun 族の卓越した占い師である Shiki の名声が Tiv にもひろまり、Kokwa という男が Shiki の第一の弟子となった。Shiki は後に honom の木の

皮でできた薬を与え、卵と混ぜたもので儀礼を施してやった。Kokwa は一種の社をつくり、葉が正しく管理されるならば、人々は、'mbatsav'（妖術者）から保護され、また、永遠の生命を与えられるだろうと主張した。

Tivの目には、異常な能力や高い技能をもつ人間は tsav をもっているとうつつるのである。政府の役人も tsav をもつ。tsav がなければ、かれらの職務を遂行できないとされている。老人も tsav をもつ。ある人が年をとって長く生きることができるのは tsav のせいである。Tiv はすべての死を tsav に結びつける。tsav が死の原因であるというのは正しくない。死は病気と同じく、多くの原因が重なって生じるもので、Tiv もそれを認めているのであるが、それだけでは十分ではなく、死の意思の源泉を知らなければ満足しない。意思の源泉は、祖先とも精霊とも、呪物とも結びつかない。意思の源泉は tsav である。それに対抗しうるものは swem であるが、tsav に対する単なる対抗力であるにすぎない。

tsav のある人間は、伝統的にも英領植民地のもとでも Tiv 社会のリーダーであり、必要不可欠の存在である。彼らはまた、人を殺す力をもっている。ここに tsav をもつ人の両義性がある。tsav をもつ人々は、夜ひそかに集合して、人々に呪術をかけ、墓を荒らして、死肉を食べると考えられている。Tivland におこった Nyambua 運動を考察する時必要なことは、tsav をもつ人間の両義性に注目することである。

Kokwa が Shiki から薬をもらった時、彼はここで述べた Tiv の mbatsav (tsav をもつ人) に関する信念を前提していた。カルトは mbatsav への防衛として知られ、ヨーロッパ人に "anti-witchcraft cults" と呼ばれたが、それは Tiv 族の中だけの、あるいはアフリカ社会特有の問題ではなく、現代の問題、文化全般を考察する上でも重要な視点を提供してくれるものである。

カルトの詳細について記述するのは消略するが、Nyambua は Tiv の考え方による脅威となるものを取り除き、Tiv 社会の秩序を回復させようとする試みであった。その脅威というのは、具体的には、英領植民地下での政府の役人の横暴、経済的圧迫（税金など）であり、それに対抗するための手段が Nyambua と呼ばれたカルトであった。

Bohannan は更に、そのような「反乱」がシステムにくみこまれている例の一つに、（アメリカの）選挙をあげている。それは正常な過程の一部として認められているが、そういう形式をとらなければ、witch hunt や発作的な戦争というような病理的な形をとるであろうと考えている。この問題は、Max Gluckman の言う「儀礼的反乱」^[2]という問題とも関わってくるが、他の機会に改めて考察したい。

(c) ニアサランド

ニアサランドにおける Witch - Finding Cults の内容は A. Richards⁶⁾, M. Marwick⁷⁾,

R. G. Willis⁸⁾らによって克明に記されており、彼らが記録した Bamucapi , Bwanali - Mplumutsi , Kamcape と呼ばれている運動は、その発生した地域が隣接していることからしても、その名称からしても、あるいは運動自体の内容からしても同種のものであることはまちがいない。これらの運動は、1939年、47年、63～4年に発生したのであるが、細部においても驚くほど似ている。ここでは、その中でも特に詳細な記述があり、分析の上でも優れている R. G. Willis による Kamcape を中心に検討してみたい。

Fipa 族は、タンガニカ湖南端の台地に住むバンツ系種族である。そこでの sorcery の告発は従来個人的なもので、集団全体が関りあうことはなかったが、Kamcape による告発では村全体が関った。社会変化の結果、村は政治的にも経済的にも宗教的にも分裂し、従来村を統合する位置にいた首長の地位は下降し、sorcery の嫌疑は増大した。白装束の若者の一団が村を訪れ、村を浄化し、人々を治療し、邪術者を探知した。Kamcape の儀礼は、特権的地位にある老人の地位を下降させ、邪術使という村の統合をこわす存在という目に見える形に示すことで、村の統合を一時的にも回復しようとする意図があった。

1962年2月に、すべての政治的・行政的権力がタンガニカ国民議会に移譲された結果、あらゆる部落は二つの対立する権威に分裂した。首長とその伝統的な支持者、村落発展委員会の議長と TANU (Tanganika African National Union) に支持されたものの二つである。Fipa の村では直系的出自の観念は組織原理としては殆ど重要でない。ただ、鍛冶屋と呪医のみが専門職として父系的に継承されている。Fipa の村落は、世代的な結びつきの構造は余り発達していないが、全体としての成員の権利と義務の関係からみると、固く結合されていたといえる。

伝統的に Fipa は不幸やまれにしかおこらない現象を、非人格神、祖霊それに邪術の三つによって説明していた。邪術に対して、個人としては呪医に頼ることで解決したが、集団としては周期的に邪術使とみなされた人々を試罪法にさらしてきた。邪術使の共通のイメージは、裸で夜村落内を歩きまわり、呪術で麻痺した者の陰部や頭を動かすような老人である。邪術使は、離れていてもその犠牲者を傷つける多くの方法をもっている。ある種のハエやモグラ、ハト、隕石や猛獣に姿をかえて攻撃をするのである。

Fipa の村で始めて anti - sorcery 運動が当局の注目を集めたのは、1963年の終り頃である。ある男がひどく叩かれ傷つけられた時だった。4人の男と1人の女が逮捕された。彼らはその男を攻撃した理由は、Kamcape と呼ばれる運動の従者らが村を訪れたので、その指令に従った までだと答えた。Kamcape をするには、すべての村人が特殊な飲物と額に薬をなすりつけ、右手の拇指と人さし指の間にも薬をなすりつけることが必要だった。これで邪術からの免疫がえられるとされた。邪術の嫌疑を受けた者は、再び邪術使に戻れば、その薬で殺されるだろうと説明された。Kamcape

のやり方には共通の型がある。最初、数人のメンバーが村を訪れ、村長と秘密にあり、Kamcape は村を浄化するために活動していると説得し、翌朝早く彼らは消える。数日後、Kamcape のメンバーが村に到着し、治療を始める。

Fipa の村は政治的にも経済的にも、進歩派と伝統派に分裂している。前者は大体若者で経済的によくなく、後者は年配者が多く、良い土地を独占するなどして経済的に恵まれている。宗教の面でも、キリスト教徒の出現で対立が増大した。伝統的な Fipa では、村の内部の対立を処理する機構が存在していたが、試罪法の禁止を含めた外部からの影響で、村の統合的機能が殆ど消滅してしまった。

そのような時期に、anti - sorcery (witchcraft) 運動は発生したことは何度も述べてきたことである。Fipa では、男の年長者は特権階級であって、コミュニティの統合に責任を負っていた。もしそこに緊張や対立があるならば、責任は彼らにあったし、彼らの間にいなかったならば、その下位集団から社会全体の敵が選ばれた。反社会的な存在をみだし、害のない者にすることが Kamcape の「治療」であった。Kamcape の治療は共同体の成員すべてが参加する一種の儀礼的ドラマである。そこでは年配男子の数人が、邪術使というスケープゴートの役割を果たした。この儀礼的ドラマの目的は、あらゆる社会的緊張や対立の根本原因と考えられるもの(邪術)を廃棄することによって、コミュニティの道徳的な風土を急激に廃化させようとしたことである。

<三> 今後の展望

1960年ローデシア・ニアサランド大学で開かれた第三回 International African Institute Seminar の一般討議において、Witchcraft と Sorcery について、次の二つの仮説が承認された。⁹⁾ ① 妖術あるいは邪術の嫌疑は構造的緊張の指標であって、緊張を解消することを容易にする。② 社会の規範をドラマ化し、強化する。アフリカの rural areas で、妖術者探知運動が頻発し、都市部になると少なくなるのは、上の仮説を支持していると上記のゼミナールでは承認された。妖術の嫌疑はお互いの関係が密で競争的な所で生じるから、都市部では発生しにくいのである。ただし、現代ではマスコミのはたす魔女狩りの機能があることは事実であるが、それは別の機会に論じたい。

この論文の冒頭でも述べたことだが、列強の植民地支配に対抗するための動きは、アフリカ各地域において、さまざまな形態をとりながら出現した。妖術を社会の安定をもたらすものとみなしていると理解されているエヴァンス=プリッチャードも、アザンデ族における呪的秘結社について記録している。そして、それが社会変化に対応するために出現したものであることを正しく把握している。¹⁰⁾ 更に、ケニアの独立運動で大きな役割を果たした「マウマウ」のような政治的秘結社

も、その内部においては邪術の嫌疑は生じないとされて、多数の支持者を獲得していった。¹¹⁾ 妖術者探知運動、あるいは同種の名称で呼ばれている運動も、内容は異なるが、植民地化に対抗する動きという側面では共通している他の運動との関連で捉え直してみるのが是非必要だろう。^[4]

妖術信仰はアフリカだけではなく全世界に認められる現象である。特に、メラネシアは邪術信仰がアフリカとならんで盛んである。にもかかわらず、メラネシアには、カーゴ・カルトのような運動はあっても、anti - sorcery cults のような運動は発生しなかった。Max Marwick は、妖術や邪術の信仰は、アフリカではコミュニティ内部の緊張を反映しているが、オセアニアではコミュニティ間の緊張の反映であると述べており、¹²⁾ その差に私が疑問とする問題への手掛りがあると思われるが、なお今後の課題としたい。

ここで、V. W. Turner のコミュニタス論へ言及する余裕はないが、妖術者探知運動で演じられたRitual Drama は、まさしくTurner のいうコミュニタスの概念で捉えられる。それはまた、混沌と秩序の弁証法としても形容しうる。混沌へと進みゆく社会の秩序を強化するために、witch と呼ばれる人物をスケープゴートにして、秩序の強化を狙ったのが妖術者探知運動である。

しかし、妖術者探知運動はほんの一時的な効果しか与えることができず、歴史を動かす力として人々を牽引するものにはなりえなかった。T. O. Beidelman が指摘するように、¹³⁾ witch の烙印をおされ迫害を受けた人々のなかに、次の時代を先取りした予言者・思想家などが存在していることは事実である。

妖術者探知運動が失敗した原因は、彼らの置かれている状況をより広い文脈の中での的確に捉えることができなかつたためである。だが、そこで展開された論理は、より広い現象にも適用可能であると思われる。witch、魔女、異端、等々、社会の悪を代表していると思われる存在こそが、閉塞した状況を打破するエネルギーを秘めており、そのプロセスを明らかにしてゆくのが私の研究の目的である。この小論も、そのような問題へ向けての、私のささやかな第一歩である。

[1] 妖術者探知運動(Witch - Finding Movements), 反妖術運動(Anti - Witchcraft

[Sorcery] Movements), 妖術者浄化儀礼(Witch - Cleansing Cults) 等々、同種の運動を呼ぶのに、いろいろ異った名称がある。この小論では、しいて呼び名の統一は行なわないが、タイトルでは標題のように使用する。

[2] Gluckman の提起した問題については、Norbeck が適切に整理している。Edward Norbeck

'African Rituals of Conflict' "Americar Anthropologist" Vol. 65, 1963, 1254 - 79.

[3] “mcape”はNyavja語のku-cape(着物を洗うこと)からとられている。Fipaでは,kaは連続的な動き,あるいは最後の結果のことを言っている。R.G. Willis, 同論文. 8.

[4] アフリカの宗教運動をコンパクトにまとめた本が出版された。Harold W. Turner (ed.) “Bibliography of New Religious Movements in Primal Societies, Vol. I: Black Africa” G. K. Hall & Co., 1977.

- 1) E. E. Evans-Pritchard, “Witchcraft, Oracles and Magic among the Azande” abridged with an introduction by Eva Gillies. 1976, Oxford Univ. Press.
- 2) たとえば, Monica Hunter Wilson, ‘Witch Beliefs and Social Structure’ “The American Journal of Sociology” Vol. LVXI, 1951. 307-13, “Witchcraft & Sorcery in East Africa” ed. by John Middleton & E. H. Winter, 1963, Routledge & Kegan Paul.
“Witchcraft, Confessions and Accusations” ASA 9, ed. by Mary Douglas, 1970, Tavistock Publications.
- 3) R. G. Willis, ‘Instant Millennium: The Sociology of African Witch-cleansing Cults’ “Witchcraft, Confessions and Accusations” ASA 9. 129-139.
- 4) Mary Douglas, ‘Techniques of Sorcery Control in Central Africa’ “Witchcraft and Sorcery in East Africa” ed. by John Middleton & E. H. Winter, 1963, Routledge & Kegan Paul. 123-141.
- 5) Paul Bohannan, ‘Extra-Processual Events in Tiv Political Institutions’ “American Anthropologist” Vol. 60, 1958. 1-11.
- 6) Audrey Richards, ‘A Modern Movement of Witch-Finders’ “Witchcraft and Sorcery” ed. by Max Marwick, 1970. Penguin Books LTD., 164-177.
- 7) Max Marwick, ‘The Bwanali-Mplumutsi Anti-Witchcraft Movement’ “Witchcraft and Sorcery” ed. by Max Marwick, 1970, 178-83.
- 8) R. G. Willis, ‘KAMCAPE: An Anti-Sorcery Movement in South-West Tanzania’ “Africa” Vol. XXXVIII, 1968, 1-14.
- 9) “African Systems of Thought” prefaced by M. Fortes and G. Dieterlen, Fletcher & Son LTD, 1965, 21-27.
- 10) E. E. Evans-Pritchard, 前掲者, 205-20.
- 11) Clibert Kushner, ‘An African Revitalization Movement: Mau Mau’ “Anthropos” Vol. 60, 1965. 765-800.
- 12) Max Marwick, ‘Witchcraft as a Social Strain-Gauge’ “Witchcraft and Sorcery” ed.

by Max Marwick , Penguin Education , 1970 , 280 -95.

- 13) T. O. Beidelman , ' Towards More Open Theoretical Interpretations' " Witchcraft ,
Confessions and Accusations ASA 9 " Tavistock Publications , 1970 , 351 -6.